SANJO ROTARY CLUB
三条ロータリークラブ 週報 No. 34
2014. 3. 13（No.2772）

第2560地区ガバナー／山 﨑 堅 輔
会　　長／丸 山 行 彦
会長エレクト／髙 橋　　司（クラブ奉仕A）
副　会　長／五十嵐晋三（クラブ奉仕B）
幹　　事／船 越 正 夫
S　A　A／野崎喜一郎
会　　計／若槻八十彦

例会日／毎週水曜日12：30～
例会場及び事務局／
　三条市旭町2-5-10　三条信用金庫本店内
例会場／TEL 34-3311
事務局／TEL 35-3477　FAX 32-7095

E-mail：sanjo-rc@cpost.plala.or.jp
http：//www.soho－net.ne.jp/~rotary/
（~はshiftを押しながら“へ”のキーを
押してください）

■本日の出席会員数：55名中32名
■先々週出席率：85.19%

【ゲスト】
・NPO法人
ジャパン・ハンディキャップゴルフ協会理事
公益社団法人日本プロゴルフ協会
ティーチングプロB級　　小山田雅人 様

【先週のメークアップ】
［3.6］燕RCへ
・木村文夫さん、中村和彦さん
［3.6］三条ローターアクトへ
・渡辺良一さん、吉井直樹さん
［3.7］ガバナー補佐会議（五泉）へ
・菊池　渉さん
［3.8］ローターアクト地区大会へ
・丸山行彦さん、髙橋　司さん、
・船越正夫さん、野崎喜一郎さん、
・渡辺良一さん、荻根澤隆雄さん
（6名）
［3.10］三条南RCへ
・五十嵐晋三さん、石橋育於さん、
・小越憲泰さん、　菊池　渉さん、
・斎藤弘文さん、　金子俊郎さん、
・中村信一さん、　丸山行彦さん、
・中林順一さん　（9名）
［3.11］三条北RCへ
・斎藤弘文さん、　石橋育於さん、
・中林順一さん、　小越憲泰さん
・菊池　渉さん、　阿部吉弘さん、
・衛藤泰男さん、　加藤紋次郎さん、
・山田富義さん　（9名）

「ロータリーを実践し みんなに豊かな人生を」
2013～2014年度国際ロータリーのテーマ

会 長 挨 拶

三条東RC　小出和子　会長

皆さんこんにちは！本日は、市内4ロータリークラブ合同例会にご出席くださいましてありがとうございます。

今年度は、東RCが担当ということで、いろいろ検討させていただきましたが、会員の多くの方がゴルフに興味をお持ちかと思い、プロゴルファーをお呼びし、講演をしていただくことにしました。

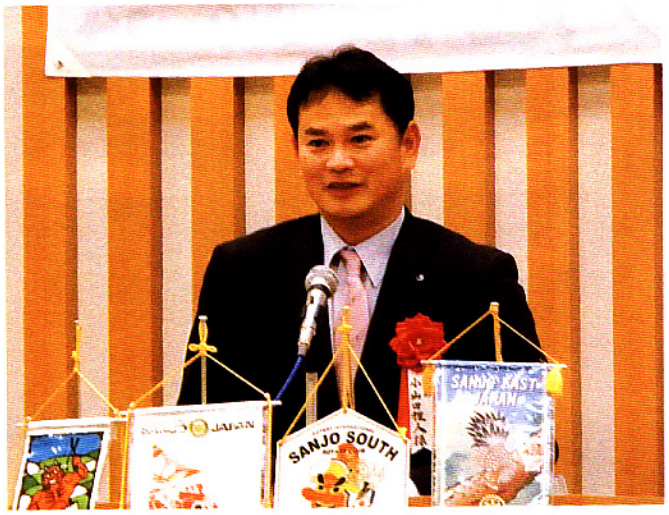
講師については、後ほどご紹介いたしますが、障害や病気を乗り越えて、努力されてプロの資格を取得してきた人のお話ですので、これからの私たちの生き方や商売繁盛に繋がるヒントを頂けるのではないかと思っております。また、講演の中で、ゴルフのスコアをアップさせるテクニックなどもお聞かせいただけるということですので、楽しみにしております。小山田様よろしくお願いいたします。

また、昨年9月に実施いたしました第4分区のＩＭの際には、中條パストガバナーはじめ、各クラブの方々よりご協力をいただき、無事終了させることができました。この場をお借りして御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

2年後には、10周年も控えておりますので、今後ともご指導下さいますよう、よろしくお願いいたします。

「講師紹介」

三条東RC 大方 一 幹事



小山田雅人（こやまだ　まさと）様　栃木県生まれです。
講師は、2歳の時に、実家が営む精肉店の機械に巻き込まれ、右手首より先を失う、大怪我に遭いました。
しかし、幼い頃より、少年は、スポーツが好きで、『野球、サッカー、陸上』と、何にでも挑戦！
中学校では、野球部のピッチャーとして、県大会準優勝！
そして、中学3年生の頃、初めてゴルフと出会い、社会人になってからは、特に力を入れ、一般アマチュア選手権大会に参戦。
2009年には、栃木県アマチュア選手権2位！
2011年栃木県、県知事杯4位！
日本障害者ゴルフ大会では、常に優勝！
そして日本代表として、世界大会に何度も出場し、優勝！
数々の素晴らしい、好成績を残されております。
そして、日本プロゴルフ協会、ティーチングプロ、合格！
『一般の方でも出来ないくらい。』
『これは素晴らしい、事だと思います。』

今日では、ティーチングプロとしても、大活躍しております。
本日は、『キャッチボールしたり…』実践を交えながらの講演とお聞きしております。1時間の限られたお時間でございますが、どうぞ、楽しんでいただければと思います。
以上、簡単ではございますが、講師紹介でございました。

「障害や病気を乗り越えて」
～人との関わりの中で～

NPO法人 ジャパン・ハンディキャップゴルフ協会理事
公益社団法人日本プロゴルフ協会ティーチングプロB級
小山田　雅人 様

みなさん、こんにちは。富士産業所属・プロゴルファーの小山田といいます。よろしくお願いします。
今、プロゴルファーと言いましたが、正式なプロと登録されたのは今年の1月1日からです。では、その前までは何をしていたかというと、公務員として栃木県庁で25年間働いていました。その25年間務めた栃木県庁を退職し、障害者でもプロゴルファーになれることを証明しよう、現在所属している富士産業にバックアップをしていただき、プロテストに挑戦し合格することが出来、正式にプロゴルファーとなることが出来ました。
今のテストになってから初めての肢体不自由者のプロゴルファーとなりました。目指したことが一つ実現しました。今後の目標は、今年9月に初めて障害者ゴルフ世界大会が日本で行われます。この大会で優勝し、障害者ゴルフで世界一になりたいと思いますし、パラリンピックでも正式競技になるかもしれないゴルフの部門での金メダルを目指しています。

それでは、「障害や病気を乗り越えて」～人との関わりの中で～とありますが、私が、2歳のときに障害を負い、23歳のときに一つ目の病気が発症し、38歳の時に二つ目の病気が発見され、そして、46歳の時に三つ目の病気が発症し、現在に至っています。
それでは、これから私が、障害や病気にあってから現在まで、「どのように生きてきたのか」また、乗り越えるためには「何が必要だったのか」「どんな人達と関わってきたのか」、ということを話していきたいと思います。

まず、右手を失ったことですが、2歳の時に実家が営業している精肉業の（というより、肉屋と呼んだ方が分かりやすいと思いますが）肉を切る機械に、間違って右手を入れてしまい、手首から先を失うという事故に遭いました。（余談ですが事故後、事故にあった機械は交換しましたけれども…）
2歳という年齢でしたから、実際に物心ついた時には、生まれた時から“右手が無い”という感覚でした。ですから両親には、右手を失った原因について、大きくなるまで聞いたこともありませんでしたし、両親を責めたりしたこともありませんでした。
では、“何故”右手を失ったことを知ったか、とい

うと、小学校の時から“テレビや新聞”の取材を受けるようになり、その取材が原因で右手を失った事を知ることが出来ました。

私の取材という訳ですから、自分は勿論のことでしたが、両親も取材を受けました。その取材の中で右手を失った原因について話していたことを、取材の場ではなく、後でテレビの放映を見て知っていったという感じでした。

そのテレビの中で両親は、自分の子どもに障害を負わせてしまったことをとても後悔している、ということを初めて知りました。〔特に母親は、普通では2歳の子供が乗ることが出来ない場所に肉を切る機械が置いてありましたが、仕事が忙しかったため、機械の前に私を置いてしまい、右手を失ったのは、自分の責任だ、と話していて、とても悲しく思えました〕

ですから、そんなに後悔している両親をこれ以上追いつめたくないですし、後悔していることを全く態度に出さないで、右手の無い私を普通の子と同じように育ててくれた両親を、《今と変えたくなく》という心境から、両親にはこの右手のことを何も聞かないようにしよう、と心に決めました。

今、小学校の時からテレビや新聞の取材、と言いましたが、それは何が原因で取材を受けるようになったか…と言うと、手の無い私が野球を始めたからなのです。

小学校3年生から野球をやるようになりました。いろいろなスポーツと出会ってきましたが、野球との出会いが、私を大きく変えたと思います。小学校3年生から、父親と家でキャッチボールを始めました。キャッチボールを始めたとき、勿論私は右手が無い訳ですから、左手でグローブを使い、ボールを捕って、ボールを捕ったグローブを地面に置いて、ボールを拾い投げ返す。そんなキャッチボールを父親と始めました。

始めた頃は、そんなキャッチボールで良かったのですが、だんだん慣れてくると、ボールを捕るたびにいちいちグローブを地面に置くのが嫌になってきました。〔どうにかして、グローブからボールを早く取る方法はないか〕と、考えるようになりました。「考える」ということは、本来、父親とキャッチボールをしている訳ですから、父親に相談していろいろな事を一緒に考えながら、より良い方法を探していくものだと思いますし、父親からすれば、私から相談された事に対して、私の教育も兼ねて私を指導していくものだと思います。それに、当時私の父親は、栃木県那須町の野球指導、という肩書きまで持っていた人なのです。ですから、私からすれば私の相談を受けるまでもなく、野球の指導をしてくれるものと思っていました。(余談ですが、私の父親はプロ野球のスカウトからプロに誘われたこともある程の野球の名手でした…。)

ですが私の父親は、毎日のようにキャッチボールはしてくれるのに、一切の指導はしてくれませんでした。「どうして教えてくれないのだろう」、子どもですから悩みました。いろいろ悩んだあげく、子どもながらにこんな答えを考え出しました。《父親は野球の指導員として障害のない人（いわゆる健常者）には良い指導が出来るのですが、私のように右手が無い人と野球をすることがなかったため、父親が教えるより、自分自身で考えることが一番の効率の良さと考えて、私に何かを考えさせようと毎日キャッチボールをしてくれているんだと思いました。》そう考えてからというもの、父親とキャッチボールを始める前まで、家の近くの壁に向かって一人でボールをぶつけて、跳ね返ってきたボールを捕ってから投げる練習をするようになりました。いかに早く捕って、いかに早く投げられるか、という練習を毎日行いました。

(キャッチボールを…)

キャッチボールが出来るようになったので、小学校4年生の時に、野球部に入部しました。野球部に入部すると、小学校では4番バッターで、那須郡大会に優勝し、中学校では、ピッチャーとして栃木県大会を準優勝しました。こういう実績を聞くと、野球を始めたときから、上手かったように聞こえますが、小学校の野球部入部当時から、上手だった訳ではないのです。むしろ、右手がない補欠選手として、野球部に在籍していました。実際に、小学校時代は、野球部の選手としても扱ってもらえず、玉拾いばかりさせられていました。そんな時なのです。今まで何も言わず黙っていた父親が、今度は指導者として、私を指導し始めたのです。先ほどまでは、障害者に指導するケースがない、と言いましたが、それは、キャッチボールだけであって、“走ったり、守ったり、打ったり”することは、私の場合は普通の人と同じだと、言うのです。……

人と同じ条件を補欠なのだから、人より練習しなさい、と言われました。それからというもの、毎晩のように練習とは名ばかりの特訓の毎日でした。

ここに居るみなさんは、テレビのアニメで見たことがないかもしれませんが、昔「巨人の星」という

野球アニメが放送されていました。父親は、そのアニメに登場する主人公の父親である“星一徹”さながらの特訓を私にやらせました。今は、もうやってはいけなくなりましたが、〔うさぎとび〕や、腕立て伏せ、腹筋、新聞紙を丸めて家の中でトスバッティング、そんな特訓を毎晩やりました。それと、今、腕立て伏せと言いましたが、そんな効果というか違いが右手と左手に現われています。
(右手と左手を比べる)

これだけ左腕を鍛えたために、左腕だけで腕立て伏せが出来るようになっています。それに、野球をするために左腕だけを鍛えたのではなく、ピッチャーであったために沢山の走り込みをしました。勿論、学校での練習時間だけでなく、家に戻ってからも一人で走っていました。そのことがあったために、普通の人と同じか、もしくはそれ以上にゴルフクラブが振れるようになりました。スポーツで野球を選択したおかげで、右手がなくても、それに代わる体の部分を応用する方法と応用するために今ある部分を強化することを学びました。

それと、今、義手を外して普通に右腕を見せていますが、実は今まで家族以外の前では“絶対”義手を外しませんでしたし、右腕も見せませんでした。なぜ外さなかったかというと…、私が小さい頃に「義手を付けていない私を見た人達が、同情するような目で私を見ていたからなのです。」今では意識しなくなりましたが、義手を付けて活躍している内はあまり相手も意識しませんでしたが、右腕を見せた瞬間から、相手の意識が今までと変わるからでした。私のことを障害者と意識してはいないのですが、「義手を外した瞬間」、「右腕を見せた瞬間」から、健常者と障害者、という変な図式が現われてしまいました。それを避けるために、義手を外すのを止めていたのです。

その義手を外すきっかけを作ってくれたのが、ゴルフとの出会いなのです。ゴルフを本格的に始めるようになったのは、高校卒業と同時でした。ゴルフを始めた頃は一人で練習場に行き、かなりのボールを打ちましたが、なかなか思い通りのボールを打つことが出来ませんでした。今のスイングになるまで、相当な時間がかかりましたし、時には、朝10時から夜10時まで練習場で練習している、なんてこともありました。

先ほどから練習や特訓の話をしていますが、私は特訓が“大好き”なんです。

それと、これはあるプロゴルファーとの会話でのことなのですが、プロゴルファーが私のスイングを見て自分の体にあった理想的なスイングだと言ってきました。基本を知っていながら、自分の体にあった動きに修正しているため、今の飛距離とスコアがあるんだと言ってもらえました。この会話は、かなりの自信につながりましたし、人のスイングや動作を気にせず、自分で思い描いたことを、貫き通している結果だと思っています。

そもそも、ゴルフというスポーツは個人スポーツです。それに、戦う相手は基本的には人間ではなくコース（自然）なんです。同じ場所に障害者が居ても気にする人は居ないんです。ただ、障害者がゴルフをするということは、健常者に比べて条件が厳しくなります。ルールについても厳しくて、義手についても条件があります。動く義手やクラブに固定する義手を付けてはいけない、ということなんです。

アメリカで行われていた障害者ゴルフ大会に、日本代表として4年出場し、手の障害部門を連続で優勝しましたが、私以外の手に障害をもっている方たちは、動く義手や固定する義手を開発して、いろいろな義手を付けて参加していました。ですが、ほかの選手達が付けている義手を付けてしまうと、通常の大会というか、健常者の大会に出ることが出来ないのです。

私の場合は、義手が動くことも出来ないし、固定することも出来ないということで、通常の大会の参加を認められました。そんな私を、ゴルフの仲間の人達は障害者とはまったく見てはいません。というのも、普通なら健常者が障害者の助けとなっていろいろな物事を処理していくものだと思いますが、ことゴルフに関しては、立場が逆転しています。現在は、いろいろな方のゴルフ指導にもあたっています。その指導をしているほとんどの人が、健常者【普通の人】です。ゴルフを教えている時に、私は右手が無いにも関わらず、相手の右手の動きを「こうしなさい」とか、「こう動かしなさい」と、左手で教えています。相手にしてみれば、右手が無い人が、「右手の動きまで分かるのかなー」って思っていても、実際に、私の教え通りにボールを打ってみて、きちんとボールが打てるようになれば、「この人は、手が有るとか無いとかは関係ないし、障害なんて感じられない」って言ってくれるようになります。この瞬間が、自分にとってはとても嬉しいし、“ゴルフって居心地が

いい場所だなー”って思えるようになりました。そんなことが繰り返されるうちに、人前で右腕を見せても大丈夫と思うようになり、義手を外し始めたのです。

(ゴルフスウィングとテクニックを…)

ですが、そんな大切なゴルフとの出会いの中で、三つの病気が発見されました。今でも、その三つの病気は治っていないため、治療を続けています。

23歳の時の病気は、脊椎分離症という病気です。あまり聞いたことがないと思いますが、ヘルニアと同じように、腰に痛みが出る症状を引き起こします。私の場合は、症状がひどくて、一人で立ち上がることも出来なくなりました。人に助けてもらってやっと立ち上がったとしても、普通に歩くことも出来ないで、何かに掴まらないと歩けない、という状態でした。病院も幾つも探して、やっと今通っている病院を探しあてました。何度か治療し、一人で普通の生活が出来るようになるまで回復したときに、先生からこんなことを言われたのです。「また同じ症状になるからゴルフは諦めなさい」と。その時はショックでした。しかし、私の良いところなのでしょうか？先生の言うことを素直に聞かないんです。先生に言われたからといって、素直には“あきらめない”のです。いろいろなゴルフ雑誌を読みあさり、腰に負担の掛からないゴルフのやり方はないのかと、一生懸命調べました。調べた結果、何とか腰の負担を減らすやり方を見つけ、先生に相談し、ゴルフを続けることの了解を得ることが出来ました。勿論、痛くなったらすぐに病院に来なさい、ということなんですが…。それから先生は、「やめなさい、諦めなさい」とは言わなくなりました。

それから、もう一つの病気なのですが、今から8年前に病気を発見されました。その病気の名は“脳腫瘍”です。《それも悪性のガンでした。》(グリオーマ) 発見後すぐに手術を受けました。頭を開いて〔脳〕そのものを取るという手術です。私の場合は、脳の中にできる腫瘍でしたので、腫瘍だけを取り除くことが出来ないため、正常な部分も含めて脳を取りました。勿論手術は成功したのですが、ただ“ガン”がある場所が場所だったため、これ以上は取ることは出来ないと言われ、ガンを一部脳に残したまま手術は終了しました。(腫瘍のある場所は、左脳と呼ばれる場所で、働きとしては、考えたり、言葉を話すために使う場所です。ですから、除去しすぎると思考能力が無くなり、今、こうして話をしていることも出来なくなってしまうのです。) そのため、私の頭の中には、今もガンが残っている状態です。勿論、ガンが残ったままですから、定期的に病院に通って進行状況をチェックしてもらっています。それに、いかに悪性のガンとはいえ、担当の先生の出来る限りの力でガンを取り除いてもらいましたし、それに、私のガンに効く抗がん剤もあります。“ある”と言っても、ここからがほかの人と違うところだと思うのですが、勿論、担当の先生と何度も話し合って決めていることですが、抗がん剤をまだ服用したり、投与したりしていない、ということなんです。ガンを持っている人間が、なぜクスリを服用しないのか。皆さん、疑問に思うでしょう？　それは、クスリの副作用が大変強いからです。副作用によってゴルフが出来なくなる、ということでした。先生も私も悩みました。ゴルフによって、いろいろな苦難や挫折を克服し、乗り越えてきたのに、世界と戦うためには今のゴルフが重要なのに…。そんな大切なゴルフを、私から無くしてしまっても大丈夫なのかと？　出した答えがこうでした。ガンの進行状況を常にチェックして、クスリを服用しなければいけない時期まで、服用をやめよう、ということでした。出来る限り今の状態でゴルフを続けよう、今の状態で世界を相手に戦えるだけ戦おう、ということです。

そんな状態が8年を過ぎて、現在でもクスリの服用もしていないのに、手術後の状態が一切変わっていません。悪性の腫瘍が頭の中に残されているのに全く変化しないのです。このことは、担当の先生も首をかしげています…。というのも、私のガンの術後10年の生存率は46%だからです。3月7日に検査した時も、先生から「小山田さんの体の中には抗体があるのかな？」と言われましたが、私は人間の中には、クスリに頼らなくてもガンに対抗する何かがあるのだろうと思っています。

ただ、そうは思っても生存率のデーターは気になります。それに、ガンと宣告されてから結婚し、娘も授かりました。もし、データーどおりになったとしても、娘の記憶に強く残したいという思いで片手のプロゴルファーを目指すことに決めました。

それともう一つの病気です。最初に1月1日からプロゴルファーになったと言いましたが、プロゴルファーとして初めてゴルフをした1月3日の夕方にその病気が発症しました。

その病名は「急性心筋梗塞」です。

毎年正月3日に行われている友人たちとの新年ゴ

ルフコンペの日でした。友人たちは私がプロゴルファーになったことを分かっていますので、みんなから「おめでとう」と声をかけられ、楽しく有意義なゴルフでした。そのゴルフの懇親会の席でのことです。みんなと楽しく会話している時に急激に胸が痛くなり、吐き気と冷や汗が止まらなくなりました。友人の中には医者もいましたので救急車を呼び病院に緊急搬送されました。病院に着くと緊急手術となり、一命を取り留めましたが、翌日、妻から1時間病院に来るのが遅かったら命がなかったと先生から言われたと聞いて本当にビックリしました。勿論、命は助かり良かったと思っていますが、通常の急性心筋梗塞患者より重症ということで、ゴルフに復帰出来るのは6ヶ月後と言われ、プロとなったのにゴルフが出来ないことにショックを受けました。しかし、ショックを受けたのは最初だけで、寝たきりの生活が一週間で終わり、リハビリを開始してからは、ゴルフが出来ないのであればリハビリ内容を徐々に強化して体力トレーニングをしようと考えました。プロにはなりましたが、自分のゴルフに足りないものも分かっています。今回の病気は、そういった部分の強化を初心に戻って“もう一度鍛えなさい”というメッセージだったのだろうと今は考えています。それに、緊急搬送された病院は関係機関に室内トレーニングセンターがあります。退院と同時にその室内トレーニングセンターでトレーナーに自分が鍛えたい筋肉の説明をして、トレーニングメニューを作ってもらい、リハビリという名のトレーニングをしています。

その成果なのか、病院での検査の結果、ゴルフの許可がおりました。早速、3月10日にゴルフをしてきましたが、入院前よりボールが飛ぶようになり、嬉しいゴルフとなりました。

ここまで話した障害や病気に関することや、思い出に残ること、その話の全ての事に関して、統一した事があります。それは、全ての事について、誰かが私に関わっている、ということです。富士産業の社長・両親・学校の先生・病院の医者・友人や仲間・そして私の「妻」です。私が、誰かと関わることによって、自分一人では～乗り越えられない～ことでも、誰かに相談することによって、自分が越えられない壁を、越えるための工夫や、超えるために必要な新しい考えを、思い描ける、ということなんです。

自分一人では、“あきらめなきゃいけないこと”は沢山あります。でも、自分が何かにぶつかっても、誰かと、関わることによって、解決方法が必ず見つけ出せるはずなんです。時には、相手にその意志がなくても、相手の言葉や行動によっては、自分に新しい道が開ける場合もあります。（私の場合は、腰を痛めたときに、病院の先生が私の体を気遣って「ゴルフをあきらめなさい」と言いましたが、“あきらめたくない”という一心から、自分なりのゴルフのやり方を見つけました。そのため、今のゴルフが出来上がり、世界を目指して戦えるようになったんだ、と思っています。）

“あきらめない”という気持ちを“決して忘れず”、そして、決して自分一人で、何とかしようとは思わないことです。心配なことや不安なことがあったら、誰にでも、相談や自分で考えていることを話してみることです。そういう気持ちを常に、《忘れないで欲しい》と思います。

それから、皆さんに、これも分かって頂きたいと思います。障害者や病気の人に対して、普通なら助けが必要です。でも、どんな時でも“声を掛ければいい”という訳ではないのです。

障害や病気を考え、相手のことを理解して、温かい目で見守っていて、障害や病気を持っている人が、“本当に困っている時”にだけ助けてあげよう、という気持ちでいて欲しいのです。どんな時でも助けていたら、その人は戦うことや努力することを忘れてしまいます。人に頼りっきりの人生になってしまいます。全ての障害や病気を理解することは、とても難しいと思いますが、ぜひ、忘れないで、障害者や病気を持った方と向かい合っていただきたいと思います。

それから、知り合いから言われたことで、私の心に強く残る言葉があります。「ないものを嘆くより、あるものに感謝したい」という言葉です。

私は手首より先を失いましたが、手首から肘までの腕の部分は残りました。その残された腕を工夫して使うことによって、いろんな事を克服出来たと思っていますし、脳についても同じです。脳腫瘍によって左脳の大部分は無くなってしまいましたが、少しの左脳と右脳が残されています。残された、左脳と右脳を使い手術前に近づこうと思っています。

それと、これは余談なのですが、先ほど関わっている人達の中で“妻”と言いましたが、私は、妻に陰から支えられています。

ガンを宣告される、ちょっと前に、私が事務職員

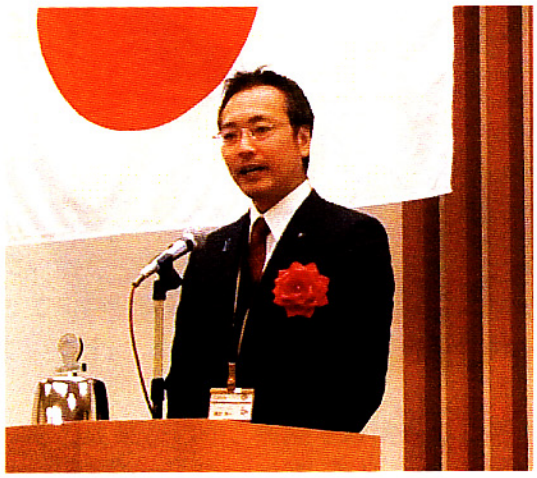
として赴任していた那須特別支援学校で知り合ったのですが、結婚前だったこともあり、実家に帰るよう妻に話しました。その話を聞いて妻は、私を叱りました。「私があなたを支えるから、出来る限りのことをやりなさい」と言われました。今では、妻は私よりも“脳腫瘍”に詳しくなっています。今は私のために、いろいろな努力をしてくれています。

最後になりますが、皆さんも“病気やケガ”または、“精神的な心のストレス”で、〔私ばっかり〕とか、〔何で私が〕、何て深く悩まないで下さい。自分以外にも特に私のように《障害や病気に遭いながらも、それと戦いながら、人生を楽しく、目標に向けて生きている人間がいるんだ》ということを忘れないでいただきたいと思います。

これで私の講演を終わりにしたいと思います。
聞いていただいて、ありがとうございました。

国際ロータリー第2560地区
ローターアクト2013～2014年度 第44回地区大会

テーマ　『進』
開催日　平成26年3月8日（土）
会　場　ジオ・ワールド VIP



次週例会　3月26日　「外部卓話」
ロータリーEクラブ サンライズ会員
三之町病院名誉理事長　山本 賢 様

次々週例会　4月2日　「外部卓話」
パストガバナー
三条RC第27代会長　中條耕二 様